

論文 | Articles

北欧のランスロット物語？
— 『美丈夫サムソンのサガ』再考 —

Lancelot Romance in the North?
: *Samsons saga fagra* Revisited

林 邦彦

HAYASHI Kunihiko

尚美学園大学
芸術情報学部

Shobi University

2020 年 3 月

Mar.2020

北欧のランスロット物語? — 『美丈夫サムソンのサガ』再考—

Lancelot Romance in the North?: *Samsons saga fagra* Revisited

林 邦彦

HAYASHI Kunihiko

[Abstract]

Erec et Enide, *Yvain*, and *Perceval*, all of which are Arthurian works by Chrétien de Troyes, who is also the author of *Lancelot*, are said to have been translated into Norwegian, but are now preserved exclusively in the Icelandic manuscripts, but any Northern European reduction of the so-called Lancelot romance is handed down till this day. On the other hand, the work called *Samsons saga fagra*, whose protagonist Samson is the son of the king “Artus” of England, is usually not regarded as an Icelandic original Arthurian romance in spite of many motifs, whose close relationship with a continental Lancelot romance is pointed out, and the work has not yet been well investigated.

In this article, after glancing over the synopsis of the work *Samsons saga fagra* and mentioning the motifs in the saga whose Arthurian origins have been pointed out, the structure of the first half of the plot will be investigated, then this article attempts to position the saga as an Icelandic original Arthurian romance in the history of the Arthurian literature.

Keywords:

Samsons saga fagra, Arthurian literature, riddarasögur, Lancelot, chastity tests

[抄録]

アーサー王伝説に題材を取ったアイスランド語による文学作品としては、アーサー王妃との不倫などのエピソードで知られる騎士ランスロット（ランスロ）を主人公とした作品は少なくとも現存はしない。一方、アイスランドで独自に物語が作られたと考えられ、複数のアイスランド語作品におけるアーサー王の名前の表記と同じアルトゥース（Artus）という名のイングランド王が登場する『美丈夫サムソンのサガ』と呼ばれる作品は、ランスロットを主人公とした大陸の作品との間で複数のモチーフの共通が指摘されているが、一般にはアイスランド独自のアーサー王文学作品とは認識されない傾向にあり、本作を扱った先行研究も少ない。そこで、本稿では『美丈夫サムソンのサガ』について、先行研究で指摘されているアーサー王物語のモチーフの大半が位置する作品前半部に焦点を当て、本作前半部の物語全体としての構造とその特徴について考察し、本作をアイスランドで独自に著されたアーサー王文学作品として位置づけることを試みたい。

キーワード：『美丈夫サムソンのサガ』、アーサー王物語、騎士のサガ、ランスロット、貞操試し

はじめに

アイスランドのサガ¹⁾作品の中には、アーサー王伝説、およびトリスタン伝説に題材を取ったものが複数伝わっているが、そのほとんどがフランス語などの外国語作品の翻案であり、一般には唯一の例外として、トリスタン伝説を扱いながらも、アイスランドで独自に物語上の改変が施された『トリストラムとイーソッドのサガ』(*Saga af Tristram og Ísoddar*)²⁾と呼ばれる作品だけが、アーサー王伝説、およびトリスタン伝説を扱ったサガ作品の中で、アイスランド独自の文学作品として著されたものと位置づけられている (Kalinke 2011a³⁾: 3)。

しかし、本稿で取り上げる『美丈夫サムソンのサガ』(*Samsons saga fagra*)⁴⁾と呼ばれる作品は、恐らくは14世紀半ばにアイスランドにおいて独自に物語が作られたものと考えられており、写本は38点残存し、そのうち最古のものは15世紀の作成とされているが⁵⁾、この『美丈夫サムソンのサガ』においては、男性の主人公サムソン (Samson) の父親として、アルトゥース (Artus) という名のイングランド王が登場する。Artus という表記は、アーサー王物語を扱ったクレチアン・ド・トロワ (Chrétien de Troyes) によるフランス語作品を原典とするサガ作品⁶⁾におけるアーサー王の名前の表記でもある⁷⁾。

『美丈夫サムソンのサガ』の物語は、前半の第一部と後半の第二部で大きく分かれるが、第一部では、アルトゥース王の息子のサムソンが、失踪した意中の女性の探索に身を投じる様が描かれる。

この作品は、第二部において、着用する婦人の貞操面の問題に応じて丈がその女性の身長に合わない形に変形するマントが登場するため、しばしば、フランス語の『短いマントの短詩』(*Le lai du cort mantel*) を原典とした『マントのサガ』(*Möttuls saga*) との関連で言及されるが⁸⁾、詳しくは後述するように、本作の第一部の物語には、アーサー王伝説の中でも、いわゆる騎士ランスロット (ランスロ) の物語に見られるモチーフが散見される。騎士ランスロットをめぐる物語は、クレチアン・ド・トロワの『ランスロ』(*Lancelot*) など、アーサー王伝説を題材としたいくつもの文学作品に描かれ、特にランスロットとアーサー王妃の不倫や、宮廷から誘拐されたアーサー王妃をランスロットが救出に向かう際、小人が牽いた荷車 (当時、荷車は罪人が乗るものとされた) にランスロットが乗るエピソードなどが有名であるが、ゲルマン系北欧語圏では、『ランスロ』の作者でもあるクレチアン・ド・トロワの作品のうち、『エレクとエニッド』(*Erec et Enide*)、『イヴァン』(*Yvain*)、『ペルスヴァル』(*Perceval*) については、それぞれが一旦ノルウェー語翻案に翻案された後、それがさらにアイスランド語へと翻案されたものが、サガ作品としてアイスランド語の写本で伝わっているが (いずれも当初のノルウェー語翻案を伝える写本は現存しない)⁹⁾、ランスロットを主人公としたゲルマン系北欧語圏の作品は少なくとも現存はせず、また、この『美丈夫サムソンのサガ』と呼ばれる作品は、一般にアイスランド独自のアーサー王文学作品とは認識されない傾向にあり、本作を扱った先行研究自体も少ない。

そこで本稿では、まず本作の物語について概観した後、本作の物語素材として先行研究で指摘されているものの中でも、特にアーサー王物語のモチーフの痕跡として挙げられている点について確認した上で、特にこれらアーサー王物語のモチーフの大半が位置する作品前半部に焦点を当て、本作前半部の物語全体の構造とその特徴について考察し、本作をアイスランドで独自に著されたアーサー王文学作品として位置づけることを試みたい。

1, 『美丈夫サムソンのサガ』の物語

『美丈夫サムソンのサガ』の物語は以下のとおりである：

若い頃には偉大な戦士で、高齢になってからは穏やかに国を治めていたイングランドのアルトゥース (Artus) 王とその妃フィリピア (Filipia) の間に生まれた息子サムソン (Samson) は、13 歳まで養父サルモン (Salmon) とその妻オリンピアート (Olimpiat) に育てられ、武芸を身に付けたが、サルモンの死後はアルトゥース王の宮廷に戻り、養母オリンピアートは郷里のブルターニュへ帰り、人里離れた森の中の城で暮らしている。一方、アルトゥース王は長い間アイルランドのガルラント (Garlant) 王と敵対関係にあったが、両者の友人が割って入り、和平が結ばれた。その和平に際し、アルトゥース王は甥を人質としてアイルランド王に引き渡し、一方、アイルランド王は娘ヴァレンティーナ (Valentina) を同じく人質としてアルトゥース王に提供した。

サムソンは誠実で人望があり、見栄えが良く、勇猛であったが、さほど物事を奥深くまで見極めて理解する人間ではなかった。ある日のこと、サムソンはヴァレンティーナに求婚するが、ヴァレンティーナは王夫妻の同意がなければ誰も結婚しないと言う。しばらくして、サムソンは実父のアルトゥース王に、ヴァレンティーナと結婚したい旨を伝えるが、父王からは、「それは彼女や彼女の父が決めることだ。また、そなたはまだ海外経験が乏しく、高貴な婦人方にはさほど巡り会っていない。また、彼女はここで人質となっているのであり、彼女に不名誉なことがあってはならない」と言われる。そして、アルトゥース王はヴァレンティーナをアイルランドへ送り返す。ヴァレンティーナの帰国後、アイルランド王も同様にアルトゥース王に人質を送り返す。

サムソンは父王に願い出て、3 年間にわたり、戦の旅に出る。その頃、ブルターニュはフィンロイグル (Finlaugr) という名の伯爵が治めていた。彼に仕える者の中に、滝の下に水車小屋を構える粉屋のガーリン (Galinn) がおり、その息子クヴィンテリーン (Kvintelin) は森の中に居を構えていたが、彼は盗人で、しかしハーブの演奏に長け、その音色で次々と女性を誘っては妊娠させ、その父や夫のもとへ返すことを繰り返していたため、はなはだ悪評を蒙っていた。その母(ガーリンの妻)は上記の滝の下の洞穴に住む怪物女であった。

なお、アイルランド王はブルターニュに大きな領地を持っており、しばしば訪れていたが、娘ヴァレンティーナとともにこの地を訪れていた折、彼女は上述の森の中でクヴィンテリーンのハーブの音色に魅了され、彼の後を追いかけてしようとする。そこへ、この地に城を構えていたサムソンの養母オリンピアートがやって来てヴァレンティーナを止める。オリンピアートは魔法に通じた人物で、彼女はヴァレンティーナに、問題のハーブ奏者が盗人のクヴィンテリーンであることや彼の習性について語り、ヴァレンティーナはクヴィンテリーンに危害を加えられないよう、当面の間オリンピアートの城に滞在することになる。

もっとも、ある朝早くのこと、川へ洗髪に出かけたヴァレンティーナは、クヴィンテリーンの奏でるハーブの音色を耳にし、魅了された彼女はまたも彼を追いかけてしようとするが、駆けつけてきたオリンピアートに取り押さえられ、注意を受けるという“事件”も起きる。

一方、サムソンは戦の旅の最中、アイルランドに立ち寄り、同地のガルラント王から、ブルターニュの森でヴァレンティーナが失踪したことを聞かされると、彼女を探しにブル

ターニュへ赴く。

サムソンはブルターニュで伯爵のフィンロイグルから、ヴァレンティーナの捜索にあたり、粉屋のガーリンに援助を求めるよう勧められると、滝の傍の水車小屋にガーリンを訪ね、ヴァレンティーナ捜索に際して援助を要請し、謝礼も約束するなど、ガーリンと一通り話をし、握手を交わして友情を結んだが、そこでサムソンは突如両足をつかまれ、滝の下の水の中へ引きずり込まれる。引きずり込んだのはクヴィンテリーンの母(ガーリンの妻)の怪物女で、サムソンは彼女を格闘の末に殺し、渦の下へ潜り込むと、ある洞窟を見つける。中へ入ってゆくと(洞窟内は登り坂になっていて、水は洞窟の途中までしかなかったのか?)、洞窟では財宝に加え、ヴァレンティーナの様々な持ち物が見つかった。サムソンはここで気に入ったものを手に取ると、洞窟を出て街へと戻ってフィンロイグルと会い、それからアイルランドへ向かってガルラント王と会ったが、みなヴァレンティーナは死んだものと考えた。それからサムソンはイングランドへ戻り、父のアルトゥース王に旅について報告した。この旅ではサムソンは多大な名声を手にしており、彼はしばしの間、父のもとで過ごすこととなった。

その後、ある日のこと、サムソンは父王に結婚のことで助言を求めると、王も、「そなたも今や多くの立派な婦人方を目にしてきただろうから」と、好意的な返事をくれる。もはやヴァレンティーナは死んだものと考えたサムソンは、フィンロイグル伯爵の娘インギアム(Ingiam)に求婚したい旨を話すと、アルトゥース王は、「彼女については良い話を聞いているが、伯爵の娘を娶ったところで私にとってさらなる名誉とはならず、また(求婚に際して)私の力も必要としないのではないか」と答えるが、春になるとサムソンはイングランドを発ち、夏の間の戦の旅を経てブルターニュに到着。フィンロイグルに会い、インギアムへの求婚を申し出ると、フィンロイグルとインギアムの両方から同意が得られ、二人の結婚が決まり、結婚式は次の夏に行うことになる。しばらくしてサムソンはアイルランドへ向かい、ガルラント王を結婚式に招待すると、イングランドへ戻り、アルトゥース王にインギアムとの結婚について報告し、式に招待すると、アルトゥース王は同意する。

結婚式の一週間前に、アルトゥース王やガルラント王らはブルターニュに到着し、フィンロイグルの出迎えを受ける。式の4日前、首長達はみな狩りに出かけたが、サムソンは森の中で、光り輝く角を持ち、異様なほどに速く走る鹿を見つける。彼は馬で鹿を追いかけるが、サムソンは落とし穴に落ち、乗っていた馬が首を折る。地面に這い上がったサムソンは、ある醜い小人が金製の車を牽引してくるのを目撃する。車の中に何があるのか(誰がいるのか)はわからなかったが、直後にその場にやってきた少年(実は変身しているクヴィンテリーン)から、その車の中にヴァレンティーナがおり、彼女がサムソンを探していた旨を知らされると、彼はサムソンは自分である旨を告げて少年に盾を与え、ヴァレンティーナにこちらへ来るよう伝えてもらうべく、自分がサムソンであることの証拠として少年に指輪を渡す。

実は金製の車を牽いていた小人はグレーレント(Grelent)という名で、クヴィンテリーンに脅され、彼に協力させられていた。例の車は小人がこしらえたもので、ある朝早く、ヴァレンティーナは庭にその車を見つけ、中へ乗り込むと、車に付与された魔法によるものか、彼女はすぐに眠りに落ち、それを受けて小人はすぐさま車を発車させたのであった。その時、オリンピアートはまだ床の中であった。

一方、話は前後するが、サムソンは少年にヴァレンティーナへの言付けを頼んでから、その場に留まっていたが、そこへクヴィンテリーンの父ガーリンがやって来る。「ヴァレンティーナを連れ去った小人を斃したいので、剣を貸してほしい」というガーリンの言葉を信じたサムソンは、ガーリンに剣を渡してしまう。しかし、程なくガーリンとクヴィンテリーンの父子は、丸腰のサムソンのもとへやって来る。クヴィンテリーンは、「お前はわしの財を盗み、わしの母を殺した」と言い、父子はサムソンに襲いかかる。傷を負いながらもサムソンはガーリンを捕らえ、ガーリンの体をクヴィンテリーンの方へ向けると、ガーリンはクヴィンテリーンの一撃が当たって落命する。サムソンは逃げるクヴィンテリーンを追ひ、クヴィンテリーンが先の洞窟の中に入ったところで、クヴィンテリーンの臀部に傷を負わせるが、それで一旦、二人は別れてしまう。

サムソンは洞窟から戻って来ると、例の金製の車を見つける。しかし、車とは離れたところに小人グレーレントとオリンピアートの姿があった。あくまでクヴィンテリーンに協力を強要されていた小人グレーレントは、オリンピアートやサムソンらと和解し、彼らは車へ向かう。ヴァレンティーナは眠っていたが、オリンピアートに起こされるとサムソンの姿を認め、再会した二人は抱擁、接吻し合う。

その頃、アルトゥース王らはサムソンを探していたが、彼の衣服が森で見つかり、サムソンはガーリンとクヴィンテリーン父子に殺されたものと見做されると、既に妃を亡くしていたアイルランド王ガルラントはフィンロイグルに、娘インギアムへの求婚を申し出て、フィンロイグル、インギアム両方から同意を得る。そこへサムソンとヴァレンティーナ、オリンピアート、小人グレーレントらが現れ、周囲は驚くが、サムソンはガルラントからヴァレンティーナとの結婚を許され、ヴァレンティーナも同意。結婚式は翌夏と決まる。

その後、サムソンはクヴィンテリーンの洞窟へ行き、彼を捕らえて帰ってくる。慈悲を乞うクヴィンテリーンに関し、サムソンは彼の殺害を提案するが、オリンピアートは反対し、クヴィンテリーンには罰として、「4人の妖精の女性達が18年かけて織り上げた魔法のマント(貞操に問題のある女性が身に付けると、丈がその女性の身長に合わない形に変形するもの)¹⁰⁾」を探してくるよう命じる。クヴィンテリーンの希望により、マントの探索にあたり、小人グレーレントの同行が認められる。ここまでが本作の第一部である。

第二部では物語内容は大きく変わり、しばらくは、本作のここまでの登場人物とは全く関わりのない人物達をめぐって物語が進行する。第二部の物語は以下のとおりである。

「巨人の国」(Iotunheimar)の近隣に位置するグライスイス・ヴェトゥレル(Glæsis veller)東部を統治していたゴドゥムンドゥル(Godmundr)王は、敗北に終わった「巨人の国」への戦の旅の帰途、「小さな乙女の国」(Smameyia land)へ立ち寄る。王はこの国で一人の乙女を妊娠させ、彼女を連れて帰ることにするが、彼女は船上で男児を産むと事切れてしまう。現状では、法の定めにより、この男児とその子孫は奴隷になってしまうことから、ゴドゥムンドゥル王は、生まれた男児をある農場へ置き去りにして自国へ帰る。

この男児を見つけたのはクロークル(Krokr)という名の貧しい農夫であったが、子どものいなかったクロークル夫妻は、男児をシーグルドゥル(Sigurdr)と名付けて養育する。

その頃、「巨人の国」はスクリーメル(Skrymer)という名の王が統治しており、クロークルは毎年、スクリーメル王に牡羊の羊毛を貢物として納めていた。一方、クラープ(Krapi)という名の巨人には4人の娘がおり、彼女らは編み仕事に長けていたが、彼女らはスクリ

リーメル王のもとから羊毛を盗んで来るのを常としていた。羊毛の盗難に気付いていたスクリーメル王は、盗難を防ぐ手立てがわからなかったが、ある夜、王は、羊毛の置かれてある地下室で物音がするのを耳にし、降りてみると、クラーピの4人の娘達（ここでは「4人の妖精の女達」(alfkonur fíorar)と記される¹¹⁾が既に貢物で積み荷をこしらえていた。彼女らは王に問い詰められると、自分達の命を受け出そうとするが、王は彼女らに、この羊毛を用いて、数多くの特質を備えた一着のマント¹²⁾を不眠不休で作成するよう命じる（後にマントは完成し、スクリーメル王の手に渡る）。

一方、シーグルドゥルはクロークル夫妻のもとから最高級の牡羊をスクリーメル王に献上しに行くと、王から大層寵愛を得、王のもとに滞在し、巨人の嗜みを学ばせてもらう。

その後、スクリーメル王はシーグルドゥルに、実父のゴードゥムンドゥル王のもとを訪ねるよう勧める。シーグルドゥルが旅立つ折、スクリーメル王は、妖精の女性達が作成した上記の魔法のマントをシーグルドゥルに持たせてやる。

シーグルドゥルは実父のゴードゥムンドゥル王のもとを訪ねると、王から快く受け入れてもらえ、しばらく滞在させてもらう。シーグルドゥルが戦の旅に出たいと言うと、王から船と部下の人員を都合してもらう。シーグルドゥルは三つの地域を荒らし回り、それらの地を支配下に治めると、そのうちの一つであるビャルマラント (Bíarmaland) のハーレークル (Harekur) 王の娘エドゥニー (Edny) と結ばれ、しばらく同地に滞在する。

やがてシーグルドゥルは、ゴードゥムンドゥル王のもとへ戻ることになるが、出発前にエドゥニーは病死。二人の間には息子が一人生まれていたが、彼はハーレークル王のもとで育つことになる。

その後、シーグルドゥルは「巨人の国」のスクリーメル王のもとへと戻り、その娘ゲルドゥル (Gerdr) と新たに結ばれるが、スクリーメル王は、自国と王位は自分の実の息子ギルドゥル (Gyrdr) に継がせ、娘ゲルドゥルには「小さな乙女の国」を与える意向を語る¹³⁾。

それでもシーグルドゥルは、王女ゲルドゥルと結婚でき、「小さな乙女の国」ももらえたものの、当時、遠征中であったギルドゥルはそれをよく思わず、「小さな乙女の国」へ向かい、略奪行為を行う。それを聞いたシーグルドゥルは応戦し、戦闘に発展した末、ギルドゥルは落命。シーグルドゥルは、巨人の軍勢を連れてやってきたスクリーメル王に和解を申し出ると、王はシーグルドゥルに、今後、「巨人の国」を訪れることなく、「小さな乙女の国」と魔法のマントを返すよう求めたが、シーグルドゥルはスクリーメルを殺害。シーグルドゥルは「巨人の国」の王となって長く同国を治め、100歳を超えても統治者として健在で、その頃には妃のゲルドゥルは亡くなっていたが、生前の彼女との間にウールヴル (Vilfur) という名の息子を儲けていた。

一方、ロシアではアーペル (Aper) という名の伯爵が国を治めており、彼は既に妻は亡くしていたが、この伯爵にはフラプンボルク (Hrafnborg) という名の娘がおり、妃を亡くしていたシーグルドゥルは老齢にもかかわらず、フラプンボルクに求婚。伯爵らにとって、シーグルドゥルはあまりに高齢とは思われたが、伯爵はシーグルドゥルへの畏怖から断り切れず、フラプンボルクはシーグルドゥルに娶わせられ、結婚式が執り行われることになる（その折、シーグルドゥルの息子ウールヴルは遠征中であった）。

ここで、物語はクヴィンテリーンの動向に戻る。マントの探索に小人グレーレントの同行を認められたクヴィンテリーンは、小人グレーレントと一緒に、第一部で登場した金

製の車を用意してロシアへ行き、伯爵令嬢フラプンボルクのいる近くに車を止め、彼らは車を離れる。車に気付いたフラプンボルクは車に乗り込むと、第一部におけるヴァレンティーナと同様、たちまち眠りに落ちる。そこへやってきたクヴィンテリーンは彼女の服を身に付け、魔法でフラプンボルクと姿を取り換えると、シーグルドゥルとの結婚式に臨み、小人はフラプンボルクの乗った車の見張りをする。

結婚式でシーグルドゥルは、例の魔法のマントを持って来させ、女性達による試着が行われるが、マントが身長に合わない形に変形するケースが続出し、次々と女性達の不貞が明るみに出る。最後に新婦の番になると、新婦（に変身したクヴィンテリーン）は着替えのための場所が欲しいと申し出て、認められる。しかし、シーグルドゥルがその近くへ歩み寄ると、新婦に変身していたクヴィンテリーンはシーグルドゥルを撲殺。マントを携えて一目散に逃げ去り、車に戻ると、本物のフラプンボルクも連れて巨人の国から姿を消す。

ちょうどアイルランドにおいて、サムソンとヴァレンティーナの結婚式が執り行われる折に、クヴィンテリーンら一行が戻って来て姿を現す。その場ではクヴィンテリーンが奪ってきた魔法のマントの試着が行われ、ほとんどの女性はマントの丈が合わないが、ヴァレンティーナにはぴったり合う。クヴィンテリーンはマントをサムソンに与えると、サムソンはそれを新妻にプレゼントする。なお、フラプンボルクはフィンロイグルと結ばれる。

サムソンから忠誠を認められたクヴィンテリーンは伯爵の位を与えられ、さる島の監督を託されるが、魔法のマントを奪い取る際に彼が犯したシーグルドゥルの殺害を受け、その息子ウールヴルは軍勢を連れてクヴィンテリーンのもとへ行き、彼らはクヴィンテリーンを捕らえて絞首刑の形で殺害する。

次に彼らはアイルランドへ向かうと、同国のガルラント王側と戦闘になり、ガルラントは戦死。フラプンボルクの頼みもあり、フィンロイグルはウールヴルやロシアの伯爵アーペルと和解。ガルラント王の死によって未亡人となったインギアム（もとはフィンロイグルの娘）はウールヴルと結婚。二人の間には息子が生まれ、シーグルドゥル（Sigurdr）と名付けられる。なお、アーペルはサムソンの養母オリンピアートと結婚。

なお、サムソンとヴァレンティーナの間にはヘルボルク（Herborg）という娘が誕生。ウールヴルの息子シーグルドゥルはヘルボルクに求婚し、結ばれる。アルトゥース王の死後、既に高齢となっていたサムソンはイングランドの王位を継ぐ。

例の魔法のマントはサムソンがインギアムに与えたが¹⁴⁾、その後、グイマル（Gujmar）という名のヴァイキングの男に盗まれ、アフリカへと持ち去られる。マントは長くアフリカにあった後、エリダ（Elida）という名の嫉妬深い女性権力者がイングランドの、かの権勢高きアルトゥース王のもとへと送り、そこで『マントのサガ』¹⁵⁾と呼ばれる物語の元となる。以上が『美丈夫サムソンのサガ』の物語である。

2, 『美丈夫サムソンのサガ』におけるアーサー王物語のモチーフをめぐる先行研究での指摘

『美丈夫サムソンのサガ』を扱った、決して多くはない先行研究では、本作の物語素材として様々なものが取り上げられているが、特に本作の第一部については、先行研究で指

摘されている物語素材の多くを、アーサー王物語のモチーフが占めているのが特徴である。ここでは、本作の第二部に関わるものも含めて、本作において指摘されているアーサー王物語のモチーフについて確認したい。

まず取り上げるのは、『美丈夫サムソンのサガ』の第二部においては、フランス語作品の『短いマントの短詩』、およびアイスランド語の『マントのサガ』と呼ばれる作品のテーマとなっている、「貞操に問題のある女性が身に付けると、丈がその女性の身長に合わない形に変形する魔法のマント¹⁶⁾」の製作に至る経緯が記されているのに加え、同じ第二部の末尾（すなわち、作品『美丈夫サムソンのサガ』全体としての末尾）において、本作に登場したこのマントがいわゆるアーサー（アルトゥース）王の宮廷にもたらされ、上記の『マントのサガ』で描かれている物語の元になった旨が記されているため、少なくとも結果的には、『美丈夫サムソンのサガ』の物語は『マントのサガ』の物語の前史の形となっているが、この、本作末尾において、マントがアーサー（アルトゥース）王の宮廷にもたらされ、『マントのサガ』で描かれている出来事が起きた旨を記した記述は、明らかに後世の写字生が書き加えたものと思われる（Simek 1982: 23; Simek 1985: 208, 212）という点である。実際、『マントのサガ』と『美丈夫サムソンのサガ』の両方を収めた写本は3点現存するが（Simek 1982: 24-5）¹⁷⁾、この末尾の記述は、『マントのサガ』と『美丈夫サムソンのサガ』の両方を初めて同じ一つの写本に収めた写字生が、両作品の間に接点を作ろうとして『美丈夫サムソンのサガ』の末尾に書き加えたものの、当作品では、アルトゥース王の死去を記した記述の後に、「アルトゥース王の宮廷」へマントが持ち込まれた旨の記述を付け加えた形となっており（47頁）、時系列面から見た物語の一貫性を顧みておらず、この末尾の記述の付加は失敗に終わっている（Simek 1982: 23）、と指摘されている。

もし、このマントをめぐる末尾の記述が、後世の写字生が物語の時系列的な一貫性を考慮せずに付け加えたものであるなら、本作の作者は、主人公サムソンの父として登場するアルトゥース王について、いわゆる「アーサー王」と同一人物として登場させているとの解釈も成り立つが、これに対し、Kalinke（1987: LXXXI-LXXXIII）は、『美丈夫サムソンのサガ』に登場するアルトゥース王に関し、「権勢を誇り、多くの臣下を従え、偉大な首長で（Rikur ok fiolmennr ok hofþingi mikill）」（1頁）¹⁸⁾、「彼は若い頃には偉大な戦士であった（hermadr mikill medan hann var a ungum alldri）」（1頁）と記された特徴は騎士のサガ¹⁹⁾作品群における他の多くの主人公達にも当てはまるもので、『美丈夫サムソンのサガ』の中には、本作がいわゆる「アーサー王」と円卓の騎士をめぐる物語であることを示す要素は何もないとして、本作に登場するアルトゥース王は、作者がいわゆるアーサー王とは別人として登場させたもので、本作に登場したマントが「アーサー王」の宮廷へ持ち込まれたことを記した本作末尾の記述も元からあったものだと解釈している。

そして、この他にも、『美丈夫サムソンのサガ』の物語については、アーサー王物語のモチーフの痕跡が何点も指摘されているが、結論から先に言えば、これらはすべて騎士ランスロットの物語に見られるモチーフなのである。

既述のように、アイスランドのサガ作品には、アーサー王伝説を題材としたものが何点か現存し、それらのうちの3点は、クレチアン・ド・トロワが12世紀後半にフランス語で著した『エルクとエニッド』、『イヴァン』、『ペルスヴァル』が、それぞれいずれも13世紀にノルウェー語に翻案され、それらがさらにアイスランド語のサガ作品へと翻案され

たものだと考えられている²⁰⁾。

そしてクレチアンは、これらノルウェー語、さらにはアイスランド語へと翻案された3作品の他に、アーサー王物語を扱ったものでは『ランスロ』(Lancelot)と呼ばれる作品も著しているが、ゲルマン系北欧語圏では、この『ランスロ』を原典とする翻案作品に限らず、いわゆる騎士ランスロットを主人公とした文学作品は少なくとも現存はしない。

しかし、ランスロットの名前はゲルマン系北欧語圏で全く知られていなかったわけではない。と言うのも、これは『美丈夫サムソンのサガ』を扱った上記のSimekによる先行研究でも指摘されているが(Simek 1985: 205)、クレチアンの『イヴァン』冒頭の、アルトゥース王の宮廷における聖霊降臨祭の場面において、主人公のイヴァン(Yvain)を含むアルトゥース王の宮廷の何名かの騎士達が、王の寝室の扉の前に集まっており、その騎士達の名前が列挙される地の文の記述があるが²¹⁾、そのうちの一人であるドディニアウス(Dodiniaus)の名が、『イーヴェンのサガ』ではLancelothに替わっているのである²²⁾。

この他にも、先に挙げた『トリストラムとイーソッドのサガ』の中に、ランスロットの物語の影響を指摘されている箇所が存在する。トリストラム(Tristram)は伯父王やその妃イーソッド(Ísodd)と同じ部屋のベッドで眠っていたものの、トリストラムとイーソッドの不適切な関係を知らされた王の命で、トリストラムは、伯父王夫妻の部屋とは窓が向かい合った別の部屋での寝起きを余儀なくされ、それ以後は、トリストラムは両方の部屋の間をロープを張り、そのロープを伝って伯父王夫妻の部屋の寝床へ忍び込むようになっていたが、ある時、トリストラムは伯父王夫妻の部屋まで到達してから寝床の端へと飛び移る際、手を打って出血し、寝床に血が付着する。すると、イーソッドは剣で自分の手を突いて出血させ、それから彼女は自分とトリストラムの血を混ぜて、王が見てもそれがトリストラムの血だとはわからないよう工作をする、というエピソードがある²³⁾。

しかし、同じトリスタン伝説を扱ったサガ作品でも、古典的なトリスタン物語を忠実に伝える『トリストラムとイーセンドのサガ』の方では、トリストラム(Tristram)と伯父王夫妻は同じ部屋の中の別のベッドで眠っており、王が部屋を留守にしている間に、トリストラムは王妃イーセンド(Ísönd)²⁴⁾のいる寝床へ行こうとしたが、小人の提案で、トリストラムがイーセンドの寝床まで歩いて行けば、床に足跡が付くよう、床には小麦粉が撒かれてあり、イーセンドの侍女ブリングヴェットがその小人の行為に気付いてトリストラムに伝えていたので、トリストラムは自分の寝床からイーセンドのいるベッドまで床を飛び越えたが、その日はトリストラムと伯父王夫妻はそろって瀉血²⁵⁾をしてもらっていたため、トリストラムは床を飛び越える際に瀉血をした箇所の血管が開き、イーセンドのいる寝床へ飛び移ってから出血が続いて寝床に血が付着し、やがて王が戻って来て(その時にはトリストラムは自分の寝床に戻っていたが)、自分達の寝床に血が付いているのに気づく、という形であり²⁶⁾、アイスランド独自の『トリストラムとイーソッドのサガ』の方ではこの箇所に改変が施されていることがわかるが、ここに見られる改変の内容と関連して、クレチアンの『ランスロ』には、ランスロ(Lancelot)がアルトゥース王妃グイネヴァレ(Guinevere)の寝室に窓から忍び込もうとして窓の柵を折り曲げる際、柵で手を切り、その結果、彼の傷口から出た血が王妃の寝床に付いてしまうという場面があり²⁷⁾、上記の『トリストラムとイーソッドのサガ』に見られた改変は、クレチアンの『ランスロ』における

この場面の影響である可能性が指摘されているのである (Simek 1985: 206; Kalinke 2011b: 157)。

これらの点はいずれも、各作品におけるごく一部の要素あるいはモチーフについて、ランスロットの物語との共通性が指摘されているケースであるが、『美丈夫サムソンのサガ』では作品中に、ランスロットの物語を扱った大陸の作品に見られるモチーフの痕跡が何点も指摘されている (Simek 1982; 1985)。それらのうち、特にランスロットの物語に特徴的なものと言えるのは、「男性主人公が、誘拐された女性の救出に向かう点」や、「小人が牽いた車」といったモチーフであるが (Simek 1985: 208-10)、Simek は、同じ騎士ランスロットを主人公とした作品でも、クレチアンの作品よりもむしろ、ドイツ語圏の詩人ウルリヒ・フォン・ツァツィクホーフェン (Ulrich von Zatzikhoven) の『ランツェレット』 (Lanzelet)²⁸⁾の方により多くのモチーフの類似を認めている (Simek 1982: 29-34; Simek 1985: 209-11)。具体的には、「魔術に長けた養母」、「女性の誘拐」、「魔法に満ちた森の中で護られた日々を送る女性」、「白鹿、あるいは(角から)光を発する鹿の追跡」、「魔法のマントによる貞操試し」、「誘拐された女性が魔法で眠らされる」、「(小さな)乙女の国」、「誘拐された女性と、彼女を探索する男性主人公の間に不倫行為が行われない」といった要素である (Simek 1982: 32; Simek 1985: 210)。

しかし、Simek は、ウルリヒの『ランツェレット』自体を『美丈夫サムソンのサガ』に対する当該モチーフの供給源とは見なしていない。なぜなら、ランスロットの物語に特徴的な「小人が牽いた車」のモチーフがウルリヒの作品には登場しないからである (Simek 1985: 211)。ウルリヒの作品は、現存しないフランス語の原典を比較的忠実に翻案したものと考えられているが、Simek は、ウルリヒの作品と『美丈夫サムソンのサガ』の間で、アルトゥース王を除けば登場人物名に全く一致が見られないことにも着目し、大陸で学んでいたアイスランドの学僧が、ウルリヒの作品の原典となったフランス語の作品 (その時点では小人が牽いた車のモチーフを含んでいた) のことを知り、その記憶をアイスランドへ持ち帰ったことが、『美丈夫サムソンのサガ』における上記のモチーフの存在につながるなどしたのではないかと見ている (Simek 1982: 32-3; Simek 1985: 212)²⁹⁾。そして、『美丈夫サムソンのサガ』に登場する、「貞操に問題のある女性が着用すると丈がその女性の身長に合わない形に変形する魔法のマント」についても、そのモチーフの供給源となったのは『マントのサガ』ではなく、『ランツェレット』の原典となったフランス語作品の記憶なのではないかとしている (Simek 1982: 33; Simek 1985: 212)³⁰⁾。

『美丈夫サムソンのサガ』におけるアーサー王物語のモチーフの痕跡としては、このような点が先行研究において指摘されている³¹⁾。

しかし、本作の物語構造に関しては、先行研究では、Schäfer (2013³²⁾: 112-7) によって、「本作では主人公のサムソンが、高貴な生まれで然るべき養育を受けるも、当初は求婚が認められない状態から、戦の旅で経験を積み、見聞を広めるなどして求婚の資格を有するようになり、高齢になったところで王位を継承し、その段階になればもう激しい戦闘には従事しない、という形で、一つずつ然るべき段階を踏む形で人生を歩む姿が描かれており、その歩みは物語冒頭に記された父アルトゥース王の歩みと一致している」旨が指摘されているが、特にアーサー王文学として見た場合、本作の物語構造の特徴としては、まだ未指摘の点が見受けられる。また、本作のプロットは、上記のウルリヒの『ランツェレット』と

は大幅に異なるものである³³⁾。

そこで以下、特にアーサー王物語、中でもランスロットの物語の影響が色濃く見受けられる本作の第一部に焦点を当て、アーサー王物語として見た場合の本作第一部の物語構造の特徴について考察し、本作をアイスランドで独自に著されたアーサー王文学として位置づけることを試みたい。

3, 『美丈夫サムソンのサガ』第一部の物語構造の特徴

本作の第一部では、アルトゥース王の息子サムソンがアイルランド王女ヴァレンティーナに恋心を抱いてから、念願叶って彼女を娶るまでの物語が描かれているが、この、ヴァレンティーナと結ばれるまでの第一部のサムソンの冒険は、アルトゥース王のもとで始まるとともに、アルトゥース王のもとで終わっており、またこの第一部自体、サムソンがヴァレンティーナを死んだものと思って一旦アルトゥース王のもとへ戻ったところで、大きく前半と後半に分けて捉えることができるものである。

と言うのも、主人公サムソンはヴァレンティーナへの求婚の意志を固めるも(3頁)、父アルトゥース王から海外での経験不足を指摘されると(4頁)、戦の旅に出て(6頁)、失踪した恋人の捜索に入る(12頁)。しかし、恋人の死を突き付けられ(たと思い)、一旦アルトゥース王のもとへ戻る(16頁)。

そして、サムソンは新たにブルターニュのフィンロイグル伯爵の娘インギアムへの求婚の意志を固め、アルトゥース王に告げると(16-7頁)、必ずしも好意的な返事はもらえなかったものの(17頁)、求婚の旅に出てインギアムとの結婚を決めるが(18頁)、結婚式の行われる地域で再び、当初の恋人ヴァレンティーナの捜索に入ることになり(20頁)、彼女と再会(26頁)の後、アルトゥース王のもとへ戻り、当初の恋人であったヴァレンティーナと結ばれる(29頁)。

サムソンがヴァレンティーナを死んだものと思い、一旦アルトゥース王のもとへ戻ったところで本作の第一部を前半と後半に分けて捉えるなら、前半と後半はいずれも、サムソンがそれぞれ別の女性(前半ではヴァレンティーナ、後半ではインギアム)への求婚の意志を固め、父アルトゥース王に語ることが冒険の発端となる(3-4頁/16-7頁)。そして、いずれの場合も父王から良い返事は得られない(4頁/17頁)。一方、ヴァレンティーナは第一部の前半と後半のいずれにおいてもクヴィンテリーの罠に嵌まるか、あるいは嵌まりそうになる(前半では彼の奏でるハープの音色に魅入られ、彼の後を追うも、すんでのところオлимпиаートに救われるということが二度にわたって起こるが、後半ではクヴィンテリーの意を受けた小人の罠に嵌まる:8頁、10頁/23頁)。そしてサムソンは、第一部の前半ではヴァレンティーナとの結婚を意識して彼女の捜索をし(12頁～)、後半では当初は別の女性との結婚を考えるも、ヴァレンティーナの生存を知らされると再び彼女の捜索へと身を投じ(20頁～)、前半と後半のいずれにおいても、ヴァレンティーナの捜索過程でクヴィンテリーの父ガーリンの一家のメンバーと戦うことになる(前半ではガーリンの妻の怪物女を格闘の上に斃し、後半ではガーリン自身を斃す:14-5頁/24頁)。また、前半・後半とも、サムソンの養母オлимпиаートが主人公側の若い人物達の見守り役として登場する(8頁～/25頁～)。

このように、本作の第一部の物語は大きく前半と後半に分けて捉えることができ、また、前半と後半では、いくつもの要素が対応を示していることがわかる。そしてサムソンは、この第一部の前半と後半という二段階を踏む探索の旅を克服し、本命の恋人ヴァレンティナーナと結ばれる形となっている。

また、本作はアルトゥース王の宮廷から物語が始まり、主人公の騎士が一連の冒険を経て、物語のクライマックスでアルトゥース王のもとへ戻って来るという形を取るが、このパターンは、アーサー王物語を扱ったクレチアン・ド・トロワの作品の中でも、特に『エレクトとエニッド』や『イヴァン』、および、これら二作品にそれぞれ由来する『エレクトスのサガ』、『イーヴェンのサガ』にも見られるものである³⁴⁾。

また、『エレクトとエニッド』や『イヴァン』の物語については、主人公の騎士が物語の途上、一旦大きな挫折や名誉の失墜を経験するところで物語を前半部と後半部に分けて捉え、主人公の騎士が二段階にわたって真の名誉を獲得する過程を描いたものと解釈するのが通例であるが、『美丈夫サムソンのサガ』の第一部においても、当初は意中の女性との結婚を認められなかった主人公が、一度は彼女の死を突き付けられたと思い、失意のうちに父王のもとへ帰り、他の女性に求婚するということがありながらも、それを挟んだ二段階のプロセスを踏み、最後には本命のヴァレンティナーナと結ばれ、さらに第二部では自分の敵であったクヴィンテリーンをも赦して伯爵の地位を与えるなど(45頁)、人間としての器の広がりを感じさせるエピソードが加わっている。

もっとも、サムソンの人物像の一面として記されている、「さほど物事を奥深くまで見極めて理解する人間ではなかった」という点³⁵⁾が、本作の第一部全体の物語を通じて改善される形になっているかどうかは、はなはだ疑わしい。Schäfer (2013: 118-9) の指摘にもあるが、第一部全体のクライマックスが近くなった段階でも、サムソンは森の中で、クヴィンテリーンの意を受けた小人グレーレントが牽く金製の車を目撃した後、ガーリン父子にあっさり武器を騙し取られ、彼らと戦う羽目に陥っているからである(20-1頁、23-5頁)。

一方、本作ではアルトゥース王の妻はフィリピアという名であるが、この王妃は作品冒頭で名が記された後は、ほとんど物語に参加することはない³⁶⁾。これに対し、本作の若い主人公らに対し、彼らを見守るような眼差しを投げ掛ける様が作中で一貫して描かれているのは、『ランツェレト』において主人公の養母となる「湖の貴婦人」に対応する人物との指摘もある(Simek 1982: 32; Simek 1985: 210)、サムソンの養母オリンピアートの方である。

4, 結語

既述のように、Kalinke は、本作に登場した魔法のマントがいわゆる「アーサー王」の宮廷へ持ち込まれ、『マントのサガ』で描かれている出来事のもとになった旨が記されている本作末尾の記述に関しては、この記述はあくまで元からあったもので、本作に登場するアルトゥース王は、いわゆる「アーサー王」とは別人物であると解釈しており(Kalinke 1987: LXXXI-LXXXIV)、この『美丈夫サムソンのサガ』をアイスランドで独自に著されたアーサー王文学作品としては認識していないが(Kalinke 2011a: 3)、ここまで述べてきたように、特に本稿で焦点を当てた本作の第一部に関しては、Artus という、クレチアン作品に由

来するサガ作品における「アーサー王」の表記と同じ名を持つ王の子息を主人公とし、ランスロットの物語に見られるモチーフをふんだんに（もちろん独自の改変を施して）用いながら、アーサー王物語を扱ったクレチアン・ド・トロワの諸作品と類似した物語構造を持つ作品に仕上がっていると言えよう。

また、本作に登場した魔法のマントのその後をめぐる作品末尾の記述についても、サムソンとヴァレンティナーの結婚式の折に、サムソンがクヴィンテリーンからマントをもらうと、それを彼はヴァレンティナーに贈り物として与えてしまうが³⁷⁾、作品末尾の記述では、「美丈夫サムソンが所有していた、かの見事なマントは彼がインギアム夫人に与えたが、それから、それ（マント）はグイマルという名の一人のヴァイキングの男に奪われた」

(skickia su hin goda sem S(amson) fagri atti gaf hann fru Ingiam. en þui næst var hun Rænt af einum vikingi þeim er Gujmar h(iet).) とある (47 頁)。結婚式の場面では、かのマントはサムソンがヴァレンティナーに贈った旨が記され、マントは彼女のものとなっていたのであるから、サムソンがヴァレンティナーの夫、あるいは国王（インギアムに贈った折に既に王位についていたのであれば）としての権限で、夫人の所有物となっていたマントを他人に与えたということもあり得るかも知れず、また、仮にサムソンよりもヴァレンティナーの方が先に逝去し（作中にそのような記述はないが）、その後、夫であったサムソンが亡妻の遺品となったマントを他人に譲ったということもあり得ようが、いずれにせよ、この点では末尾の記述には、「サムソンが結婚式の折にヴァレンティナーにマントを贈った」旨の記述との間で、いささかの不整合さを感じないでもない。

これらの点を踏まえるなら、本作の中で、アーサー王物語のモチーフの痕跡が顕著に見られ、クレチアンの作品群やそれらに由来するサガ作品と類似した物語構造を有しているのはあくまで第一部のみで、本作の全体としての物語は、アーサー王物語特有のモチーフとはほとんど無関係の部分が中心となった第二部と合わせた形で伝承されているとしても³⁸⁾、魔法のマントをめぐる本作末尾の記述は、Simek (1982: 23; 1985: 208, 212) の言うように、あくまで後世の写字生が本作の物語内容をよく顧みないまま付け加えたもので、本作に登場するアルトゥース王は、いわゆる「アーサー王」と同一人物、ないしは「アーサー王」に由来する人物として作者が登場させているものと解釈するのがむしろ自然であり、本作をアイスランド独自のアーサー王文学作品と見なすことができるのではないだろうか。

付記

本稿は、日本ケルト学会第 39 回研究大会（於 慶応義塾大学日吉キャンパス、2019 年 10 月 26 日）における発表原稿に加筆修正を施したものである。貴重なご意見をくださった方々に感謝申し上げたい。

註

1) サガ (saga) とは、12～14 世紀のアイスランドにおいて多数著された散文の書物。サガは今日、個々の内容に応じて大きくジャンルに分けて捉えるのが通例で、それらにはノルウェー王の伝記を扱った「王のサガ」(konungasögur) と呼ばれるジャンルや、アイスランドへの定住から社会規範の確立、キリスト教への改宗とその結果に至るまでの有力者個人やその家族の生活を描いた「アイスランド人のサガ」(Íslendingasögur) と呼ばれるジャ

ンル、基本的に 870 年のアイスランド植民よりも前の段階に物語（史実ではない）の時代設定がなされた「古い時代のサガ」（*fornaldarsögur*）と呼ばれるジャンルの他に、「騎士のサガ」（*riddarasögur*）と呼ばれるジャンルが存在する。この「騎士のサガ」とは、外国語の騎士文学の翻案を内容とする一群のサガ作品、および、それらの作品からモチーフを借用してアイスランドで独自に物語が作られた作品群の両方を含むジャンルで、アーサー王物語やトリスタン物語を題材としたサガ作品は「騎士のサガ」に該当する。

2) トリスタン伝説を扱ったサガ作品には、この『トリストラムとイーソッドのサガ』の他に、もう 1 点、『トリストラムとイーセンドのサガ』（*Tristrams saga ok Ísöndar*）と呼ばれる作品があるが、後者の『トリストラムとイーセンドのサガ』は、13 世紀にノルウェー王のホーコン 4 世（*Hákon Hákonarson*、在位 1217-1263 年）が、ブリテンのトマ（*Thomas of Britain*）作によるフランス語の作品『トリスタン』（*Tristan*）を、修道士ロベルト（*Robert*）に命じてノルウェー語に翻案させたものが、さらにアイスランド語へと翻案され、今日では、15 世紀以降のものとされる 5 点のアイスランド語の写本によって伝承されている作品で（当初のノルウェー語翻案を伝える写本は現存しない）、トマの作品を比較的忠実に翻案したものとされ、内容的には古典的なトリスタン物語と呼ぶことのできる作品であるが、これに対し、『トリストラムとイーソッドのサガ』と呼ばれる作品は、恐らくは 14 世紀ないしは 1400 年頃にアイスランドで著されたものと考えられ、こちらも 15 世紀以降のものとされる 5 点のアイスランド語の写本によって伝承されているが、『トリストラムとイーセンドのサガ』と比べると、人物やプロットの非常に基本的な内容こそ合致しているものの、分量は大幅に少なく、その内容は様々な点で大幅に異なるものである。

3) Kalinke, Marianne E., “Introduction”. In: Marianne E. Kalinke (ed.), *The Arthur of the North. The Arthurian Legend in the Norse and Rus’ Realms*. Cardiff: University of Wales Press, 2011. pp. 1-4. 以下、Kalinke (2011a)とする。

4) 原文テキストは、Wilson, John (ed.), *Samsons saga fagra*. Samfund til Udgivelse af gammel nordisk Litteratur, 65/1. Copenhagen: Printed by J. Jørgensen, 1953 を使用。以下、本作の原文からの引用箇所、および原文テキストにおける特定の箇所の掲載頁を記す際は、このテキストの頁数を記載。

5) 本作品を伝える現存写本の所蔵先や写本番号、推定製作年代等については、Kalinke, Marianne E. and Mitchell, P. M., *Bibliography of Old Norse-Icelandic Romances*, *Islandica*, 44. Ithaca/London: Cornell University Press, 1985, pp. 94-5 を参照。

6) 12 世紀後半にフランス語で詩作活動を行ったクレチアン・ド・トロワは、現存するものだけでも、アーサー王物語を題材とした叙事詩を 5 点著しているが、そのうち、『エレクトとエニッド』（*Erec et Enide*）、『イヴァン』（*Yvain*）、『ペルスヴァル』（*Perceval*）については、それぞれノルウェー語に翻案された後、そのノルウェー語のものがさらにアイスランド語に翻案されたと考えられており、それぞれ『エレクスのサガ』（*Erex saga*）、

『イーヴェンのサガ』 (*Ívens saga*)、『パルセヴァルのサガ』 (*Parcevals saga*) と呼ばれる作品となって、アイスランド語の写本で伝承されている (いずれについても、当初のノルウェー語翻案を伝える写本は現存しない)。なお、『パルセヴァルのサガ』の内容は、主としてクレチアンの『ペルスヴァル』の前半の、ペルスヴァルを主人公とした部分の翻案で、クレチアン作品後半のゴーヴァン (*Gauvain*) が主人公となる部分は、『ヴァルヴェンの話』 (*Valvers þáttur*) として独立している。以下、本稿では便宜上、『パルセヴァルのサガ』と『ヴァルヴェンの話』を合わせて『パルセヴァルのサガ』と呼ぶ。

7) 以下に挙げる、『エレクスのサガ』、『イーヴェンのサガ』、『パルセヴァルのサガ』の各作品の原文テキストを参照。『エレクスのサガ』: Blaisdell, Foster W. (ed.), *Erex saga Artuskappa*. Editiones Arnarnagnæanæ, Series B, vol. 19. Copenhagen: Munksgaard, 1965; 『イーヴェンのサガ』: Blaisdell, Foster W. (ed.), *Ívens saga*. Editiones Arnarnagnæanæ, Series B, vol. 18. Copenhagen: C. A. Reitzels Boghandel, 1979; 『パルセヴァルのサガ』: Kölbing, Eugen (ed.), *Parcevals saga, Valvers þáttur*. In: *Riddarasögur: Parcevals saga, Valvers þáttur, Ívens saga, Mírmans saga*. Zum ersten mal herausgegeben und mit einer Literarhistorischen Einleitung versehen von Eugen Kölbing. Strassburg: Karl J. Trübner, 1872, pp. 1-53; 55-71.

8) 具体的には、Schlauch, Margaret, *Romance in Iceland*. Princeton; Princeton University Press, 1934 (Reissued. New York: Russel & Russel, 1973), pp. 156-7、および Kalinke, Marianne E., “Arthurian Echoes in Indigenous Icelandic Sagas”. In: Marianne E. Kalinke (ed.), *The Arthur of the North. The Arthurian Legend in the Norse and Rus’ Realms*. Cardiff: University of Wales Press, 2011, pp. 145-67 (以下、Kalinke (2011b) とする), pp. 160-1 など。『マントのサガ』の原文テキストは、Kalinke, Marianne E. (ed.), *Mottuls saga. With an Edition of Le Lai du Cort Mantel by Philip E. Bennett*. Editiones Arnarnagnæanæ, Series B, vol. 30. Copenhagen: C. A. Reitzels Boghandel, 1987 を使用。『マントのサガ』の物語は以下のとおりである: アーサー王の宮廷を訪れたある若者によって、同宮廷に、「貞操に問題がない女性にはぴったり合うが、貞操に問題がある女性が着用すると、その問題のありように応じてマントが変形し、体の大きさに合わなくなる」という魔法のマントが持ち込まれる。アーサー王妃をはじめ、宮廷の女性達による試着が始まると、誰一人としてマントの合う女性は見つからないが、最後にある一人の乙女が試着をすると、マントはぴったりと合い、彼女はマントを与えられ、恋人とともに宮廷を去り、マントはある修道院に預けられる。

なお、この『美丈夫サムソンのサガ』と『マントのサガ』の間では、それぞれの作品に登場する魔法のマントの働きにいささかの違いが見られるが、これについては後出の註 12 において詳述する。

9) 詳しくは註 6 を参照。

10) 註 8 でも記したが、本作における「魔法のマント」の働きについては註 12 にて詳述する。

11) 「彼（スクリーメル王）はそこに 4 人の妖精の女達の姿を認め、彼女らは貢物で積み荷を作り終えていたのであった」（sa hann þar alfkonur fíorar ok hófdu buit síer byrðar af skattinum.）との記述がある（34 頁）。

12) 「数多くの特質を備えた一着のマント」（eina skickiu með morgum natturum）とあるが（34 頁）、先の註 8 でも少し触れたように、本作における魔法のマントの働きは、『マントのサガ』におけるものとはやや違いがある。『マントのサガ』では、アルトゥース王の宮廷に持ち込まれたマントが暴くのはあくまで、身に纏った女性の不貞とそのありようだけであったが、『美丈夫サムソンのサガ』においては、既出の Kalinke, Marianne E. (ed.) *Möttuls saga*, 1987, p. LXXXII における指摘にもあるように、このマントについて、「それ（魔法のマント）は自らの夫を欺いた女性達の不実さや、家で怠惰に時を過ごしていた乙女達を暴くのであった」（hun birti fals epter konum þeim sem falsat hófdu bændr sína edur meýjar þær sem odyggiliga hófdu heima setit）（40 頁）、「もし、盗人がそのマントを身に纏えば、マントは地面に落ちた」（ef þjófur klæðizt skickiunni þá fell hun á jorð）（44 頁）との記述があり、このマントが暴くのが身に纏った「女性の不貞」だけではないことがわかる。

13) 「巨人の国」の王であるスクリーメルが「小さな乙女の国」を娘に与える意向を語ったということは、この時点でスクリーメル王は「小さな乙女の国」を我が物としていたか、あるいはそれを自分の裁量で誰かに与えることのできる権限を有していたことになるが、どの時点からスクリーメル王が、そのように「小さな乙女の国」を自由にできる立場にあったのか、あるいは「巨人の国」と「小さな乙女の国」が何らかの主従関係にあったのかなどは、作中では明示されていない。

14) この、本作の末尾近くのところに、「美丈夫サムソンが所有していたかの見事なマントは彼がインギアム夫人に与えた」（skickia su hin goda sem S(amson) fagri atti gaf hann fru Ingiam.）との記述があるが（47 頁）、サムソンの結婚式の場面では、「クヴィンテリーンはかのマントをサムソンに与えた。すると、彼はそれを結婚式での贈り物として自らの妻に与えた」（Kuintelin gaf S(amsoni) skickiuna. enn hann gaf hana sinni fru j beckiar gíof.）とあり（45 頁）、これ以後、マントはヴァレンティーナの所有物であったはずだと考えられ、一見すると、上記の「マントをサムソンがインギアムに与えた」との記述との間にいささかの不整合さを感じないでもない。この点については、詳しくは本稿本文で後述する。

15) フランス語の『短いマントの短詩』に由来し、今日、アイスランド語の写本によって伝承されている作品は、『マントのサガ』（*Möttuls saga*）と呼ばれているが、*Möttuls* とは、「マント」をあらわす単語 *Möttul* の属格形である。一方、『美丈夫サムソンのサガ』のこの末尾の箇所では、アルトゥース王の宮廷に持ち込まれたマントが元で生まれたサガのタイトルは *skickju saga* と記される（47 頁。原文表記のまま）。*skickju* とは、「マント」をあらわすアイスランド語の別の単語 *skickja* の属格形で、結局、このサガの邦題は『マントのサガ』となり、一般には、この“*skickju saga*”とは、今日までアイスランド語の写本に

よって伝承され、*Möttuls saga* と呼ばれている『マントのサガ』のことを指すものと考えられている (Simek, Rudolf, “Einleitung”. In: Rudolf Simek (trans.) *Zwei Rittersagas. Die Saga vom Mantel und die Saga vom schönen Samson: Möttuls saga und samsons saga fagra*. *Fabulae mediaevales*, 2. Vienna: Braunmüller, 1982, pp. 7-39; Simek, Rudolf, “Lancelot in Iceland”. In: Régis Boyer (ed.) *Les Sagas de Chevaliers (Riddarasögur): Actes de la Ve Conférence Internationale Sur Les Sagas (Toulon, Juillet 1982)*, 1985, Paris : Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, pp. 205-16; Kalinke edn 1987: LXXXI-LXXXIV; Kalinke 2011b: 160-1)。

16) 既述のように、『美丈夫サムソンのサガ』における魔法のマントの働きは、『マントのサガ』におけるものとはやや違いがある。詳しくは註 12 を参照。

17) 具体的には AM 181b fol. と AM 238 8vo、Kall 246 fol. の計 3 点。

18) 註 4 を参照。

19) 「騎士のサガ」については註 1 を参照。

20) 詳しくは註 6 を参照。

21) クレチアンの『イヴァン』の原文テキストは、Kristian von Troyes, *Yvain (Der Löwenritter)*. Textausgabe mit Variantenauswahl, Einleitung, erklärenden Anmerkungen und vollständigem Glossar. Herausgegeben von Wendelin Foerster. Vierte verbesserte und vermehrte Auflage. Halle a. S.: M. Niemeyer, 1912 を使用。この場面の記述は 53-60 行にかけて記される (2 頁)。

22) 『イーヴェンのサガ』の原文テキストは、註 7 に挙げた Foster W. Blaisdell の版を使用。この版では、『イーヴェンのサガ』を伝える複数の写本のうち、3 点の主だった写本 (Stockholm6、AM489、Stockholm46) の本文が 3 段パラレルの形で掲載されており、いずれの写本についても、この箇所の掲載頁は使用テキストの 5 頁であるが、本文に記した Lanceloth との綴りは Stockholm6 写本における表記で、AM489 写本では Lantelot、Stockholm46 写本では Lancelot と表記されている。

23) 『トリストラムとイーソッドのサガ』の原文テキストは、*Saga af Tristram ok Ísodd, i Grundtexten med Oversættelse af Gísli Brynjúlfsson. Annaler for Nordisk Oldkyndighed og Historie*, 1851, pp. 3-160 を使用。この箇所の記述は 60・62 頁 (この版ではアイスランド語原文とデンマーク語訳が対訳の形で掲載)。

24) 本稿では、『トリストラムとイーセンドのサガ』の原文テキストは、*Tristrams saga ok Ísondar*. Mit einer literarhistorischen Einleitung, deutscher Übersetzung und Anmerkungen zum ersten Mal herausgegeben von Eugen Kölbing, Heilbronn: Verlag von Gebr. Henninger, 1878; Reprint. Hildesheim: Georg Olms Verlag, 1978 を使用。この版では、トリストラムの伯父王の

妃イーセンドの名は Ísond と記されており、これは日本語表記では「イーソンド」となるが、彼女の名は研究論文などでは Ísönd（日本語表記では「イーセンド」）と記されることが多く、本稿でも日本語表記は「イーセンド」とした。

25) 症状の改善のために患者の血液の一部を体外へ排出する治療法。

26) 『トリストラムとイーセンドのサガ』の使用テキストについては註 24 の記載を参照。この箇所の記述は本テキストの 70 頁。

27) 『ランスロ』の原文テキストは、*Der Karrenritter (Lancelot). In: Der Karrenritter (Lancelot) ; und das Wilhelmsleben (Guillaume d'Angleterre) von Christian von Troyes. Herausgegeben von Wendelin Foerster. Amsterdam: Ropodi, 1965, pp. 1-252* を使用。この箇所の記述は 4601-4773 行 (163-9 頁)。

28) ウルリヒの『ランツェレト』の原文については、Kragl, Florian (ed.) Ulrich von Zatzikhoven: *Lanzelet: Text – Übersetzung – Kommentar. Studienausgabe, 2. Auflage. de Gruyter Texte. Berlin/Boston: De Gruyter, 2013* を使用。『ランツェレト』の物語は以下のとおりである:ゲネヴィース(Genewîs)国の王がその冷酷さゆえに家臣の反逆に遭って殺害されると、まだ赤子であった王子ランツェレト(Lanzelet)は、さる貴婦人(湖の妖精)に連れ去られ、女性だけが住む島で、自分の名や素性は教わらないまま養育される。15歳になると旅に出て、いくつかの冒険と二度にわたる結婚を経て、養母である貴婦人の望み通りに彼女の敵を斃し、その斃した敵の娘と結ばれ、彼女が生涯の妻となる(三度目の結婚)。「貴婦人の望み通りに彼女の敵を斃したら、自分の名前と素性を教えてもらえる」との約束通り、ランツェレトは貴婦人から送られた使者を通じて、自らの名と素性(自らがアーサー王の甥である旨)を知らされる。その後、ランツェレトはアーサー王宮廷の騎士として、王妃が誘拐された折などに同宮廷の戦力の一員として宮廷に尽力。その後、ランツェレトは実父が治めていた国と妻の故国の王位を継承する。

なお、作品についての概説は、白木和美「ウルリヒ・フォン・ツァツィクホーフエン『ランツェレト』概論」渡邊浩司編著『アーサー王伝説研究 中世から現代まで』(中央大学人文科学研究所研究叢書 71、中央大学出版部、2019年、189-208頁)などを参照。

29) 具体的に Simek が名指ししているのは、『クラウルスのサガ』(*Klári saga*)の作者として名が記されており、1322年から39年までスカウルホルト(Skálholt)の司教を務めたヨウン・ハトゥルドールソン(Jón Halldorsson)である。ヨウンは若い時分にパリとボローニャで学び、数多くのロマンスや物語に触れたとされる(Simek 1982: 33; Simek 1985: 212)。

30) もっとも、Kalinke (2011b: 161)では、ウルリヒの『ランツェレト』に登場するマントは、女性の貞操面での問題を暴くものではなく、男女がアンドレーアス・カペルラヌスの『愛について』(*De amore*)の精神による宮廷風恋愛のしきたりを守ることができるかどうかを試すもので、『マントのサガ』やその原典とされる『短いマントの短詩』に登

場するものとは性質が異なるとして、『美丈夫サムソンのサガ』の作者は『マントのサガ』を知っていて、そこから自作のために、貞操試しのマントというモチーフを借用したのではないかと述べている。なお、Kalinke (2011b) では、これより他に、『美丈夫サムソンのサガ』の物語素材について、特に目立った独自の指摘はなされていない。

31) 本作の物語素材については、先行研究では、アーサー王物語以外の素材の痕跡についても多く指摘されている。まず、作品前半部については、失踪したヴァレンティーナを探してブルターニュへ乗り込んだサムソンが滝の下で粉屋のガーリンと遭遇した後、その妻(怪物女)に滝下の水中へ引きずり込まれ、彼女との格闘の末、その殺害に至るエピソードについて、古英語作品の『ベオウルフ』 (*Beowulf*) や、サガ作品の中では「アイスランド人のサガ」に含まれる『グレットイルのサガ』 (*Grettis saga*) に類似したエピソードが見られる点 (Lawrence, William Witherle, *Beowulf and Epic Tradition*. Cambridge: Harvard University Press, 1928, pp. 188-93, 246-261; Lawrence, William Witherle, “Beowulf and the Saga of Samson the Fair”. In: Malone, Kemp (ed.) *Studies in English Philology. A Miscellany in Honor of Frederick Klaeber*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1929, pp. 172-181; Chambers, Raymond Wilson, *Beowulf. An Introduction to the Study of the Poem with a Discussion of the Stories of Offa and Finn*. 3. ed. with a Supplement by C. L. Wrenn. Cambridge: Cambridge University Press, 1959, pp. 454-77, 484; Simek 1985: 208 他)、および、豎琴の演奏によって誘拐が引き起こされるという要素は、アイスランドで独自に物語が作られた騎士のサガに該当する『ヴァルディマールのサガ』 (*Valdimars saga*) にも見られる (Simek 1982: 31)、といった点が指摘されている。一方、本作の後半部の物語、特にシーグルドゥルを主人公とした部分については、北欧神話を扱ったスノリ・ストゥルルソン (Snorri Sturluson) の著作『スノリのエッダ』 (*Snorra Edda*) や、「古い時代のサガ」と呼ばれるジャンルの複数のサガ作品等との間でいくつものモチーフの共通が指摘されている (Simek 1982: 23-7; Simek 1985: 208)。

32) Schäfke, Werner, *Wertesysteme und Raumsemantik in den isländischen Märchen- und Abenteurersagas*. Texte und Untersuchungen zur Germanistik und Skandinavistik, Bd. 63. Frankfurt am Main: Peter Lang Edition, 2013.

33) 詳しくは註 28 を参照。

34) クレチアンの『イヴァン』、および『イーヴェンのサガ』の原文テキストについては、それぞれ註 21、同 7 を参照。『エルクとエニッド』の原文テキストは、Kristian von Troyes, *Erec und Enide*. Textausgabe mit Variantenauswahl, Einleitung, erklärenden Anmerkungen und vollständigem Glossar. Herausgegeben von Wendelin Foerster. Dritte Auflage. Halle a. S.: M. Niemeyer, 1934 を、『エルクスのサガ』の原文テキストについては註 7 を参照。

35) 「彼 (サムソン) は気性が激しく、物事を深く見極めて理解する人間ではなかった」 (Hann var akafur j skaplynde ok eigi miog diupuitur.) との記述がある (1 頁)。

36) 冒頭部分の後、アルトゥース王妃が登場するのは、アルトゥース王の宮廷で捕虜になっていたヴァレンティーナがアイルランドへ帰国する際、アルトゥース王妃がヴァレンティーナに美しい衣服を着せてやり、贈り物を与え、これに対し、ヴァレンティーナが王夫妻に感謝の挨拶をする場面のみである（5頁）。

37) 作中の原文については註 14 を参照。

38) 写本によっては、本作の第二部の部分が『グヴェドゥムンドゥルの息子シーグルズルの話（ゴードゥムンドゥルの息子シーグルドゥルの話）』（*Sigurðar þáttur Guðmundssonar*）との別タイトルを与えられているものもある（Simek 1985: 208）。